



第30回 地本委員会開催！

2月23日、私たちは、第30回地本委員会を開催し、当面する2025年春の闘いを組合員とOB会員、JS労の仲間が一丸となって闘うことを確認しました。



委員会では、笹田委員長と来賓の本部・成田副委員長、JS労・柳楽委員長、地本OB会・井村会長、そして小泉雄一さんからのメッセージで、今日までの闘いと、現在私たちがいる地点、そして今後の課題が明確になりました。

そして、地本執行部から提案された活動方針案が満場一致で承認されました。

**組合員、OB会員、JS労の仲間と共に、2025年春の
闘いと、組織強化・拡大に向けて全力で闘おう！**

【別紙、委員会宣言、特別決議あり】

委員会宣言(案)

本日、私たちはNLC新大阪において、第30回定期地本委員会を開催し、2025年春の闘いを組合員とOB会員が丸になって闘うことを確認した。

物価高騰がとどまらない。労働者の生活は、益々苦しくなっている。JR東海では、「業務改革」が、そして関連会社では、「グループビジョン2032」という名の効率化が、命令と服従の「労務管理」と共に進められている。そして、一向に解消されない要員不足と更なる労働強化により、肉体的・精神的な犠牲者が増加している。私たちはこの現実をしっかりと受け止めて、職場の諸問題と労働条件を改善するために闘わなければならない。

昨年12月、私たちはJR総連と決別した。それは、現在のJR総連指導部が、職場で差別され、虐げられ、悩み、苦しんでいる労働者のために闘う組織を「認めない、許さない」からだ。それだけではない。彼らJR総連指導部は、嘘の文書を拡散し、私たちを「組織破壊者」にでっち上げた。そして、私たちの運動と組織を妨害・分断・排除するまでに腐敗・墮落してしまったからである。彼らJR総連指導部は、会社に差別され、虐げられ、悩み、苦しんでいる労働者が私たちに頼ってきているのに「二重加盟は認めない」、加入している労働者の名前を知らせないと「会社から信用してもらえない」と言うのである。助けを求めている労働者に手を差し伸べて共に闘うのではなく、助けを求め、頼ってきている労働者を会社の前にさらけ出すというのである。先達が積み重ねてきた伝統ある闘いを忘れ去り、過ちを改めず、真実に背を向け、組合員とOB会員を騙し、会社・権力者と同様の言動を行うまでに変質してしまったJR総連指導部と、それに従う連中に、もはや「労働組合」を名のる資格はない。

「業務改革」と「グループビジョン2032」を強行しているJR東海と関連会社は、過去最高の収益を確保している。それは、労働者の権利が蔑ろにされ、労働条件が悪化し、労働者の健康と安全が脅かされている結果である。関連会社が社名の変更を行なっている。会社名の最初にJR東海を付けることにより「JR東海グループの一員であることを明確にするため」だと言うが、何のことはない。今まで以上に「JR東海グループの一員であることを自覚して、会社に尽くせ」という事である。本当に変えなければならないのは社名などでなく、命を犠牲にして働いている労働者の賃金であり労働条件である。私たちは、労働者の権利と利益を守る闘いを更に進める。

多額の費用をつぎ込んでいるリニアの建設現場では、水源枯渇や陥没、気泡などの環境問題が顕著になっている。大井川の水問題、残土問題は未解決のままである。建設費の返済計画も不鮮明で、経営破綻は確実である。「JR東海の経営と、障害者や弱者に対する意識は、親方日の丸のままだ」という声を無視してはいけない。私たちは、職場の労働者、沿線住民、市民団体と連帯して闘う。

アメリカの大統領に就任したトランプ氏は、「アメリカ・ファースト」を掲げ、日本の軍拡を更に要求することは必至である。石破政権は、これに呼応して軍拡を進め、憲法改悪を目論んでいる。

私たちは、テロにも戦争にも反対である。戦争をする国づくり・人づくりにつながる、あらゆる政策に反対して、真面目に活動している仲間と連帯して闘う。

私たちは、「我々にとっての国鉄改革と東海労結成の原点」を忘れず、虐げられている労働者と共に闘う。そして、あらゆる党派からの支配介入を許さず、関西の地から労働運動の灯を消さず、JS労組合員・OB会員一丸となって組織の強化・拡大を実現する。

以上、宣言する。

2025年2月23日
JR東海労新幹線関西地本
第30回定期地本委員会

あらたに確立されたJR東海労OB会と共に奮闘する特別決議(案)

昨年12月12日、JR総連はJR東海労の除名を決定した。これを受けたJR東海労本部OB会の福島会長は、本年1月23日、今後もJR総連(OB会)と共に進むために、第23回臨時総会と第24回臨時総会を開催して、OB会の解散を決定しようとした。ところが、その目論見は頓挫した。

臨時総会の当日、JR東海労本部OB会の解散に反対する各地本のOB会員が、傍聴参加を希望して総会会場に集まった。この傍聴参加希望者を見た福島会長らは、異常なほど頑なに「傍聴参加は認めない」「会場から出て行かないと総会を開催しない」という対応を続けた。そして最後に「大挙して押しかけた。これじゃ総会をやれない。今日の総会は開催しない」と宣言して、総会を開催せずに、福島会長の提案内容(OB会解散)に賛同する参加者と総会の会場から退散していった。

福島会長らが当日の臨時総会で決定しようとした議題は、①JR東海労本部OB会会則の改正について(本部OB会会則を改正する)、②JR東海労本部OB会の今後の運営について(本部OB会を解散する)というもので、まさに今後のJR東海労OB会の在り方を問う、非常に重要な議題であった。しかし、福島会長らは総会の開催を放棄して、総会の会場から退散したのだ。従って、総会の会場に残った各地本OB会員は総会を継続開催して、無責任な本部OB会事務局に変わるあらたな事務局体制に増田会長と井村事務局長を確立して、今後もJR東海労と共に奮闘することを確認したのである。

臨時総会当日に福島会長らが準備していた『議案書』と福島会長の『招集主意』で、福島会長らが何故、頑なに傍聴参加を拒否して、総会を開催せずに、会場から退散したのかが明らかになった。福島会長らは、第23回臨時総会では「JR東海労本部OB会会則の改正」の提案と質疑だけをして、採決をせずに済ませようとしていたのである。何故なら、第23回臨時総会の委員では、反対派が多くて採決できなかったからである。だから、承認もされていない各地本OB会からの「委員」を第24回臨時総会に参加させるという誤魔化して多数派形成をした後に、採決をするというシナリオを描いたのである。それは、『議案書』の第24回臨時総会では「総会委員名簿」にしているにも関わらず、第23回臨時総会では「総会委員」ではなく「総会参加者名簿」になっていることから明らかである。福島会長らは、こんな誤魔化してJR東海労本部OB会を解散しようとしていたのである。そして、福島会長の『招集主意』で、JR東海労本部・淵上委員長を批判して、全ての責任を淵上委員長に転嫁しようとしていたのである。ところが総会当日、想定外の傍聴希望者が現れ「これはまずい。傍聴参加などされたら、悪巧みがバレて糾弾される」ということになり、相談をした結果、「混乱する」「出ていってくれ」という対応を一定時間繰り返し、最終的に「言うことを聞かない傍聴者のせいで、会場が混乱して、総会が開催できなかった。」という絵を描くために、会場から退散したのである。まさに、M組という党派に操られているJR総連指導部同様の手口である。連中は現在に至っても過ちを改めていない。そして、真実を知らないOB会員を騙し、JR東海労OB会からの退会と、何もしない「セン労」のOB会づくりを進めている。

「我々にとっての国鉄改革と東海労結成の原点」を忘れ去った者は、涸れ果てていくだけである。

私たちは涸谷への道を拒否する。私たちは、東海の地から労働運動の炎を燃え上がらせるために、あらたに確立されたJR東海労OB会と共に奮闘する。

以上決議する。

2025年2月23日
JR東海労働組合新幹線関西地本
第30回定期地本委員会